

“異文化”混交のシチリア研究

—教会建築・装飾における多文化性の現地調査—

国際文化学部国際文化学科

学籍番号：26AR130

氏名：柳川桜子

目次

- ◆ はじめに
 - ・ 研究目的
 - ・ 期待される成果
 - ・ 調査日程

- ◆ 第一章シチリアの都市と宗教建築
 - ・ 第一節 多文化都市「パレルモ」
 - ・ 第二節 聖カタルド教会
 - ・ 第三節 パレルモの宗教建築
 - ・ 第四節 チェファルとモンレアーレ

- ◆ 第二章 プーリアとアラブ・ノルマン様式
 - ・ 第一節 モルフェッタとトラニー
 - ・ 第二節 バーリの聖堂と遺跡

- ◆ おわりに

参考文献

—現地調査地—

イタリア(パレルモ・プーリア)

—研究目的—

異なる民族・宗教・文化が交錯するとき、そこから人々を魅了する個性的で新たな文化が生まれることがある。古代から地中海交易における「十字路」として機能し、日常的な異文化交流の場として栄えたシチリア島には、多様な民族の文化の痕跡や記憶が幾重にも堆積しており、それゆえ、複雑で魅力的な文化的混交状態が、都市空間や建築、美術作品に見え隠れしている。

シチリアの州都パレルモは、その地名の元となったギリシア語の「Panormos(すべてが港)」という言葉の通り、古代から航海者や商人が行き交う港湾都市として栄えた。ギリシア人、ローマ人、アラブ人、そしてノルマン人と時代を経るごとに様々な勢力による支配を経験し、その影響が見られる都市計画や宗教建築は非常に興味深いものが多い。特にノルマン人による支配が展開されたパレルモを中心とする12世紀の建造物群は、「パレルモのアラブ・ノルマン様式建造物群およびチェファル大聖堂、モンレアーレ大聖堂」として、世界遺産にも登録されている。

そんなパレルモの旧市街に存在する、聖カタルド教会（Chiesa di San Cataldo）もまた、そのような典型的な異文化混交的建築作品のひとつと言える。12世紀に建設されたこのキリスト教聖堂の外観は、3つの赤い円筒ドームが特徴的なアラブ・ノルマン様式であるが、その内部では、ラテン・カトリック建築、ギリシア・東方正教（ビザンツ）建築、イスラーム建築など、異なる文化に帰属する建築要素が見事に融合されて、唯一無二の聖なる祈りの空間を創造している。

筆者はこれまでに、この聖カタルド教会に関する、イタリア語で書かれた最新の修復報告書を含む先行研究を収集・読解し、その建築学的特徴と同時に、多様な文化の影響史的解釈の議論における問題点を整理してきた。特に、イタリア人研究者ローザ・ディ・リベルト氏の論考は、聖堂内部の柱構造、開口部（窓）の構造、柱頭装飾、そして、ファサード装飾などに見られる異文化混交的建築・装飾要素の重要なポイントを複数提示しており、極めて重要な文献資料であった。

この研究旅行では、①聖カタルド教会の詳細な現地調査を行い、特に、上記研究者ディ・リベルト氏による論考のポイントを網羅的に観察・確認しながら、建築と装飾に関する学問的データ収集を行う。また、②聖カタルド教会とほぼ同時代に帰属する、11～13世紀のパレルモ市内の聖堂、および、パレルモ近郊都市モンレアーレ、チェファル、さらに、イタリア半島南部プーリア州などに点在する複数の聖堂に関してフィールドワークを実施しながら、聖カタルド教会と同様の建築的要素を含む建造物との比較検討を行う。これらの現地での研究調査活動を通して、問題の聖カタルド教会の異文化混交的特徴とその独自性を、より顕著に浮き彫りにしたい。以上、①と②の2点が、本研究旅行の主な目的である。

—期待される成果—

上記研究目的で言及したように、複数の研究者による先行研究が提示する学問的要素を、現地で実際に確認しながら調査することで、ひとつの教会建築が包含する多文化性について、より詳細な理解を得ることができる。また、現地でしか入手できない文献や希少資料を集めることで、卒業論文に向けた充実した準備を行うことができる。さらに、我々が忘れがちなことだが、学問的専門研究以外にも、ひとつの信仰の場としての教会建築が、地域の人々の素朴な信仰・信心の中心的宗教施設としてどのように親しまれて来たのか、文献資料からは理解できないそのような生活の中の聖域と人々との繋がりについても、現地で体感し、理解を深めることができる。

本研究調査、及び論文執筆のための研究活動は、異なる文化を敬い、尊重し、共存・共生していくための寛容な人間の生き方を過去の歴史や文化に学び、今の時代に伝えていくという、異文化を研究することの意味と問題意識を新たにするものである。

—研究旅行実施日程—

	滞 在 地	行 動 ・ 調 査 内 容
9月11日	福岡→台湾→ ローマ	移動(航空機)
9月12日	ローマ→ パレルモ	移動(航空機)・宿泊先到着
9月13日	パレルモ	終日：教会観察調査・資料収集 ・聖カタルド教会 ・聖マリア・デッラミラーリオ教会 →外観・内部装飾・柱頭・窓からの光の入り方等 を中心に調査
9月14日	パレルモ	終日：教会観察調査・資料収集 ・ノルマンニ宮殿, パラティーナ礼拝堂, ・聖マリア・デッラ・カテーナ教会 →アラブ・ノルマン様式を含む建造物の観察調査
9月15日	パレルモ	午前：パレルモ大学図書館での調査 →聖カタルド教会に関する資料・文献収集 午後：教会観察調査・資料収集 ・聖ジョヴァンニ・デッリ・エレミティ教会 →アラブ・ノルマン様式を含む建造物の観察調査
9月16日	パレルモ	午前：パレルモ大聖堂・大聖堂博物館での調査

		午後：教会観察調査・資料収集 ・聖クリスティーナ・ラ・ヴェテーレ教会 →アラブ・ノルマン様式を含む建造物の観察調査
9月17日	パレルモ→ チェファル	終日：チェファル訪問(移動：鉄道) 大聖堂・ノルマン時代の遺跡の観察調査
9月18日	パレルモ→ モンレアーレ	終日：モンレアーレ訪問(移動：バス) 大聖堂・回廊・大聖堂博物館での調査
9月19日	パレルモ→ バーリ	移動(航空機)
9月20日	バーリ	終日：プーリア州内の教会、遺跡観察調査・博物館資料 収集調査 モルフェッタ旧大聖堂・トラニー大聖堂
9月21日	バーリ	終日：バーリ市内の教会、遺跡観察調査・博物館資料収 集調査 サン・ニコラ聖堂・ノルマンノ・スヴェヴォ城
9月22日	バーリ→ローマ	移動(航空機)
9月23日	ローマ→台湾	移動(航空機)
9月24日	台湾→福岡	帰国

◆ 第一章 パレルモの都市と宗教建築

第一節：多文化都市「パレルモ」

イタリアのシチリア島北西部に位置する都市パレルモ。そこは、かつて緑豊かな美しい楽園都市のイメージを誇り、現在も多くの観光客で賑わうシチリアの州都である。都市全体は、西側の高台に建てられたノルマンニ宮殿から海に向かって東側に伸びる、ヴィットーリオ・エマヌエーレ通りを中心軸とし、左右に街路が伸びた構造を持つ。17世紀初頭に、これに直交するマクエーダ通りが建設され、その交差点は「クアットロ・カンティ(四つ角)¹」と呼ばれるバロックの荘厳な広場となり、日常的な市民の交流やイベントの場となっている。

パレルモという都市の特異性は、その歴史を見ると明らかになる。古代よりギリシア人など多様な人々が居住し、前5世紀にはフェニキア人の主要交易拠点の一つとなった。前3世紀にはローマの最初の属州となり、その支配は5世紀の終盤まで続く。ローマ帝国の衰退に伴い、ヴァンダル人など異民族の侵入が相次いだが、535年にビザンツ帝国の支配下に入った。その後はイスラーム教徒による支配が9世紀から11世紀にかけて続くこととなる。1072年、イスラーム勢力を打ち破り新たなパレルモの支配者となったのが、ノルマン人のルッジェーロである。彼の息子であるルッジェーロ2世は、1130年にパレルモでシチリア王として戴冠を受け、南イタリアを含む広大な領地のシチリア王国が誕生した。パレルモはその首都として、黄金時代とも言える大きな繁栄を見せた。ノルマン人によるシチリア支配は2世紀間に渡り、その後はドイツのホーエンシュタウフェン家やフランス、スペインによる支配へと続いていく。このように、歴史的に多様な人種と文化が混在する、「カオス」とも形容されるシチリア、そしてその首都であるパレルモは、その歴史を反映するような街路や建築物を多分に含んでいる。

今回の研究旅行では、そのようなシチリア史上において文化的にも大きな繁栄を見せた、ノルマン朝支配下の12世紀の建造物群に焦点を当てた。筆者が卒業論文の題材としている聖カタルド教会を中心に、同時代の建造物群に対する調査を行い、その異文化混交的要素について整理・検討していく。



写真1 クアットロ・カンティ 撮影者：筆者

¹ 角を成す四つの建物は、共通して一層目に四季を表す噴水、二層目に四人のスペイン王の像、三層目に四人のパレルモの守護聖女の像が配置されている。また、直交する二つの道路がキリストの十字架やエルサレムといったイメージを暗示するとも捉えられ、様々な寓意を含んだ空間であるとされる。(紅山雪夫『シチリア・南イタリアとマルタ』トラベルジャーナル,2001年,43頁。)

第二節：聖カタルド教会

クアットロ・カンティを南方面に曲がり、プレトリアの噴水を横目にさらに真っ直ぐに進むと、左手に現れるのがこの聖カタルド教会である。シンプルな矩形プランの直方体と、その上部に連なる3つの赤い円筒ドームが特徴的なこの教会は、12世紀半ば頃に建設された、アラブ・ノルマン様式²のカトリック教会である。18世紀には一時王立郵便局の事務所として使用され、現在はエルサレム聖墳墓騎士団に属している。19世紀に行われた修復によって、床面のモザイクや壁面等は建設当時の様相を遺している。2015年には、シチリアのアラブ・ノルマン様式建造物群の一部として、世界遺産に登録された。



写真2 聖カタルド教会 撮影者：筆者

筆者は、本研究旅行及び卒業論文執筆のため、ローザ・ディ・リベルト氏によるイタリア語論考³をはじめ、聖カタルド教会に関する先行研究について整理してきた。ここでは、それらの論考に加え、現地調査で得られた成果も踏まえ、聖カタルド教会を①歴史 ②内部の特徴 ③外部の特徴 の3点に分けて紐解いていく。

① 歴史

聖カタルド教会の創建を担った人物は、マイオーネ・ディ・バーリ(Maione di Bari)という人物であるとされている。彼は初代シチリア王であるルッジェーロ2世の下で宰相を務め、続くグリエルモ1世の下では王国の提督を務めた。その後の教会の所有者の変遷については、現存する最古の文書である1176年の売買契約書⁴を参考に考察することができる。この契約書の中には、グリエルモ・ディ・マルシコという人物が、彼の父親であるシルヴェストロが所有し、以前はマイオーネが所有していたパレルモの住宅と教会を男爵家の税関に売却したことが記されている。聖カタルド教会内部に、1161年に亡くなったシルヴェストロの娘マチルダの碑文(②内部の特徴を参照)が残されていることから、この契約書に掲載された教会が、聖カタルド教会である可能性が極めて高いことが分かる。

² 主に、ノルマン朝の支配下にあった12世紀のシチリアで建設された、ラテン・カトリック、イスラーム、ビザンツ文化の社会文化的融合が見られる様式のこと。(世界遺産センター公式サイト：<https://whc.unesco.org/en/list/1487/>参照)

³ Rosa di liberto, La chiesa normanna di S. Cataldo a Palermo, Rivista di storia dell'architettura e restauro, Nuova serie-Anno IX-N.17- Giugno 1996, pp.17-32

⁴ この文書は、モンレアーレ大聖堂のタブラリオ(帳簿)に収められている。実際、1182年にグリエルモ2世はサン・カタルド教会の所有権をモンレアーレ司教区に譲渡している。

1182年、グリエルモ2世によって教会の所有権はモンレアーレのベネディクト会に譲渡された。その後1787年に教会が王立郵便局の事務所として指定され、しばらくの間は郵便局の一部として機能していた。1875年、パレルモ市議会により郵便局の移転と教会の修復工事を行うことが決定される。修復工事は建築家のジュゼッペ・パトリコロが担い、1885年に完了した。1937年には教皇庁が聖カタルド教会をエルサレム聖墳墓騎士団に委託し、現在に至る。

②外部の特徴

聖カタルド教会の外観は、立方体の形状、上部に連なる3つの赤い円筒ドーム、中央後陣のわずかな曲線といった、主に3つの要素によって構成されている。中央後陣は東を向いており、通常は北側の入口から内部に入っている。壁面には3つずつ、光を取り入れる窓とそれに沿ったアーチが刻まれている。南側の壁面のみ、他の壁面よりも装飾が少なく簡素な印象を与える。夕方に訪れると、西側の窓から差し込む光が祭壇を照らし、より荘厳で神秘的な空間を体感することができた。特徴的な3つの円筒ドームの色は、教会の修復工事を行ったジュゼッペ・パトリコロによって選択された⁵ものである。

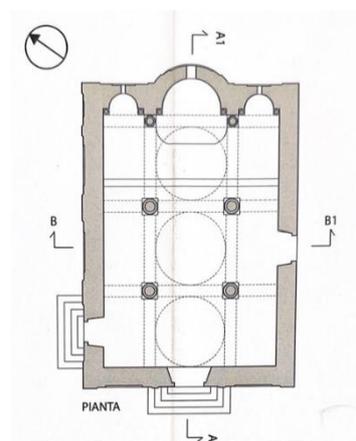


図1 聖カタルド教会 平面図
(LA CHIESA DI SAN CATALDO : RILIEVO E RESTITUZIONE より引用)

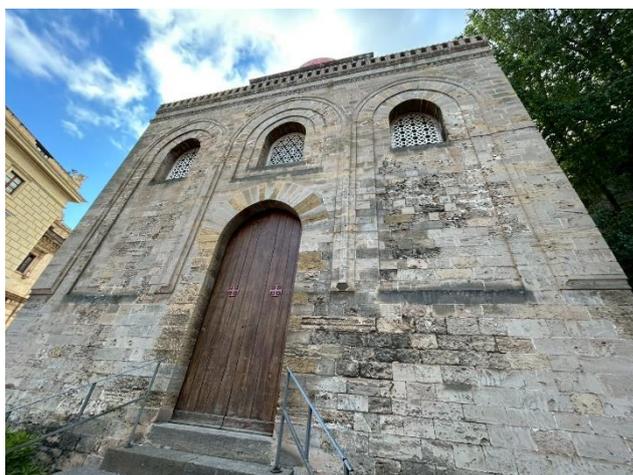


写真3 聖カタルド教会西側壁面 撮影者：筆者

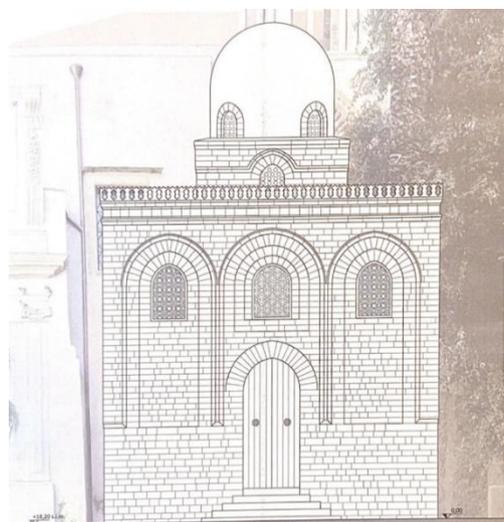


図2 聖カタルド教会西側壁面図
(LA CHIESA DI SAN CATALDO : RILIEVO E RESTITUZIONE より引用)

⁵ パトリコロは、修復前のドーム部分から採取した漆喰のサンプルを教育省に送り、赤色で塗装することの正当性を証明した。採取したサンプルからは赤いスタッコの痕跡を確認することができた。

(Rosa di liberto (1996),前掲論文,p29.)



写真4 聖カタルド教会北側壁面・入口 撮影者：筆者

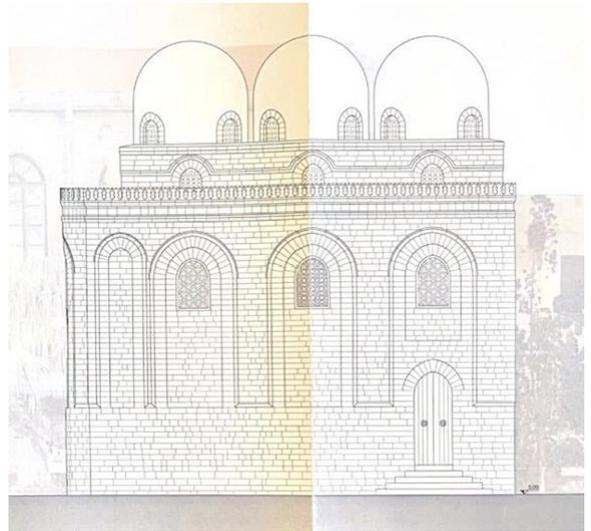


図3 聖カタルド教会北側壁面図
(LA CHIESA DI SAN CATALDO : RILIEVO E RESTITUZIONE
より引用)



写真5 聖カタルド教会東側壁面 撮影者：筆者

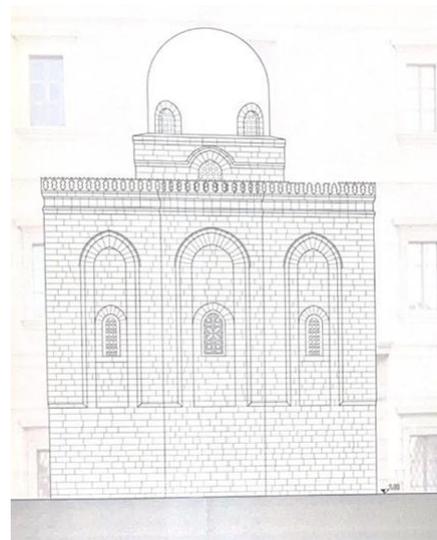


図4 聖カタルド教会東側壁面図
(LA CHIESA DI SAN CATALDO : RILIEVO E
RESTITUZIONE より引用)



写真6 聖カタルド教会南側壁面 撮影者：筆者

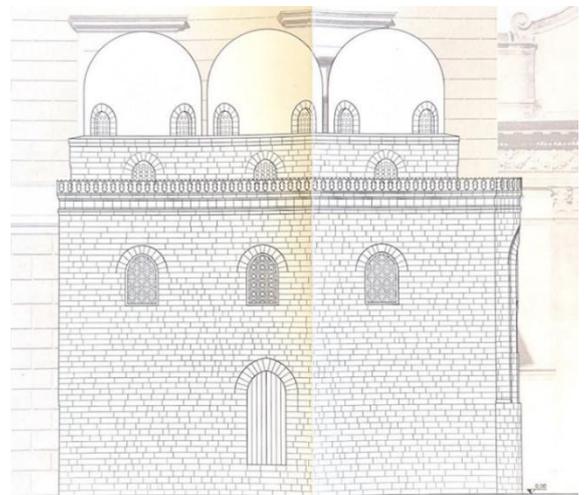


図5 聖カタルド教会南側壁面図
(LA CHIESA DI SAN CATALDO : RILIEVO E
RESTITUZIONE より引用)



写真7 聖カタルド教会東側頂上部(左) 撮影者：筆者



写真8 聖カタルド教会東側頂上部(右) 撮影者：筆者

東側の壁面に注目すると、頂上部に文字が刻まれていることが分かる。これは教会の献堂を暗示するラテン語の碑文であるとされている。ローザ・ディ・リベルト氏は、装飾要素としての文字の使用はイスラーム世界で広く記録されており、聖カタルド教会における該当部分は、そのようなイスラーム装飾の伝統をラテン語というカトリック圏で広く用いられた言語によって踏襲した、独創性に富む特徴であると指摘している。この碑文帯は、かつては建物全体を一周するように刻まれていたものと考えられており、現存するのは19世紀に修復された東側壁面部分のみである。

③内部の特徴

入口前でチケットを購入し、扉と重なるカーテンをくぐって教会内部に入る。足を踏み入れた瞬間、どっしりと重みを感じる荘厳な雰囲気が身にのしかかってくるのを感じる。

聖カタルド教会の内部は、主に3つの身廊と中央の6本の柱、上部を占める3つのドーム天井と祭壇によって構成されている。また、大理石の象嵌細工が施された床は、ほぼ完全に建設当初の状態が残されている。まず、中央身廊の天井を見上げると、3つのドームの内側を確認することが出来る。



写真9 聖カタルド教会内部 撮影者：筆者

円筒形の上に半円球が乗った構造で、その直径自体は3.5メートル未満と、意外と小規模である。ドームの基部には対角線に沿ってさらに小さなアーチが施され、全体として八角形の形状を保っている。壁面に加えこのドーム部分にも窓が配置され、教会全体で合計32個という多数の窓が外界の光を取り込んでいた。側廊の天井は交差ヴォールトで覆われている。アーチを支える6本の柱は全て石材の模様が異なり、古代の建材の転用⁶によるものであると推察され

⁶ 古代の建物や遺跡から取り外された建築部材や装飾部分を新たな建築に再利用する行為。ラテン語のスポリア(Spolia)は、元々動物の毛皮を剥ぎ取る等の意味があり、転じて「台無しにする」などの意味を持つ。ルネサンス期の人々は古代の部材再利用を批判するためにスポリアという言葉を用いた。

る。



写真10 聖カタルド教会 ドーム天井部分
撮影者：筆者



写真11 聖カタルド教会身廊左側奥2つ目の柱頭 撮影者：筆者

柱頭には、アカンサスの葉⁷など植物の文様が刻まれており、特に中央身廊左側の奥から2つ目の柱頭(写真11)のデザインは、絡まる蔦の意匠的特徴から、イスラーム起源のものであることが指摘されている。これらの個々の柱頭の意匠図像からも、様々な様式の混在が伺われる。

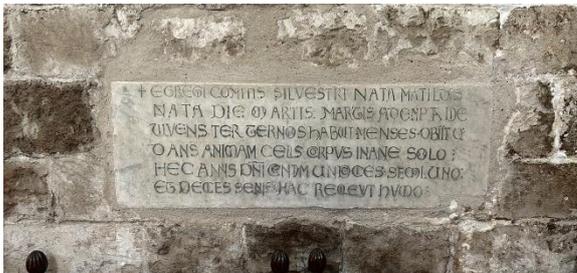


写真12 シルヴェストロの娘マチルダの碑文 撮影者：筆者

前述した1161年に亡くなったシルヴェストロの娘マチルダの碑文も確認することが出来た。北側の入口から入り、向かって正面の壁面に遺されているこの墓碑銘には、幼くして亡くなったマチルダの安寧を祈る文章が刻まれている。

祭壇の方に目を向けると、3つの窓と後陣、そして角の窪みに挿入された小さな柱を確認することができる。中央の後陣のみが外壁から突き出ており、両側は建物の厚みの中に収まっている。中央の後陣にかかるアーチを支える柱には下部に継ぎ目が見られ、明らかに建築部材の再利用が行われていたことが分かる。白大理石で作られた祭壇には、中央に神の子羊が据えられた十字架と、その周囲に四福音書記者⁸のシンボルが描かれている。聖カタルド教会の内壁には、モザイクやフレスコ画は見られない。建設当時、壁面装飾も計画されていたと思われる

⁷ 棘状になった苞葉をもつ、地中海沿岸に自生する植物。葉を意匠化したものが柱頭に用いられる。

⁸ 人間(聖マタイ)・ライオン(マルコ)・雄牛(聖ルカ)・ワシ(聖ヨハネ)の四動物。

が、創建を担ったとされるマイオーネ・デイ・バーリが1160年に暗殺されたため、実現には至らなかったものと考えられている。



写真13 聖カタルド教会 祭壇部分 撮影者：筆者



写真14 聖カタルド教会 祭壇 撮影者：筆者



写真15 聖カタルド教会 床面(中央) 撮影者：筆者

大理石の象嵌細工が施された聖カタルド教会の床面は、ほぼ完全にオリジナルの状態を遺している。7種類の異なる幾何学模様に対応する14枚のパネルで構成されており、セルペンティーノ(蛇紋石)、ポルフィドロツツ(斑岩)、ピアンコ(白大理石)、ジャッロ・アンティコ(黄色大理石)等の様々な色大理石が使用されている。床面の中央パネルは、円形の蛇紋石とそれを囲む4つの斑岩円盤、そしてさらにそれを囲む細長い六角形の斑岩によって、八角形を形成している。この八角形が、天井のドーム基部の八角形と対応し、床から天井へと移行していく様子を平面的に表現している。また、この構図が教会の中央集権的な配置をも強調していると捉えられている⁹。これら床装飾の様子は、総じて、

⁹ Tarsia, La chiesa di San Cataldo:rilievo e restituzione, UNIVERSITÀ DEGLI STUDI DI PALERMO, 2014, p.51.

コズマティ様式とも呼ばれる中世イタリアにおける典型的な象嵌細工の様式を踏襲している。様々な色大理石が織りなす幾何学模様の見事な様は驚嘆に値する。

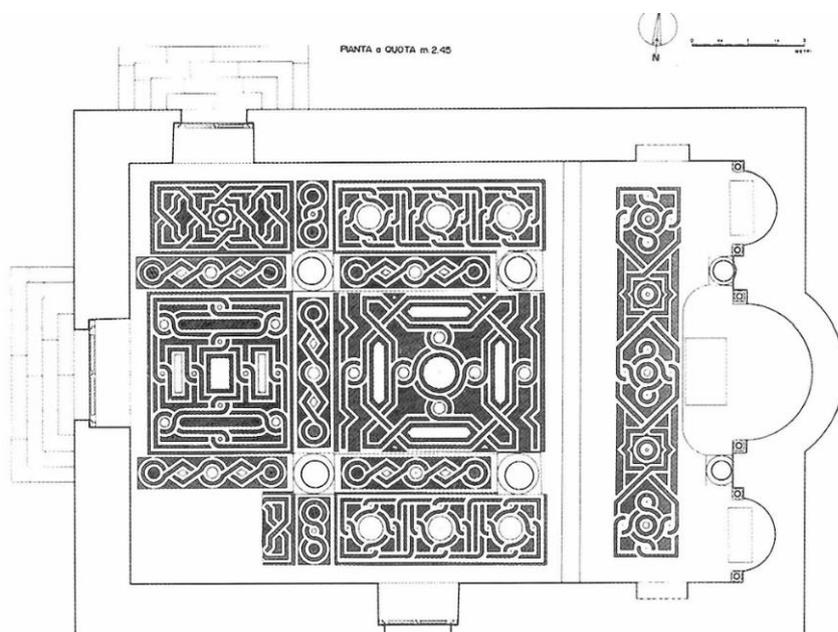


図6 聖カタルド教会 床面模式図 (La chiesa normanna di S. Cataldo a Palermo より引用)

ここまで、先行研究や現地調査での結果も踏まえながら、聖カタルド教会の歴史と外部・内部の様子について整理してきた。本研究旅行では、聖カタルド教会と同時期に建てられた類似する建築物についても調査を行うことができた。以下、第三節では、聖カタルド教会の周辺に位置する宗教建築について、概要及び調査内容を紹介したい。

第三節：パレルモの宗教建築

- 聖・マリア・デッラミラーリオ教会(マルトラーナ教会)

Chiesa di Santa Maria dell'Ammiraglio(detta la Martornana)

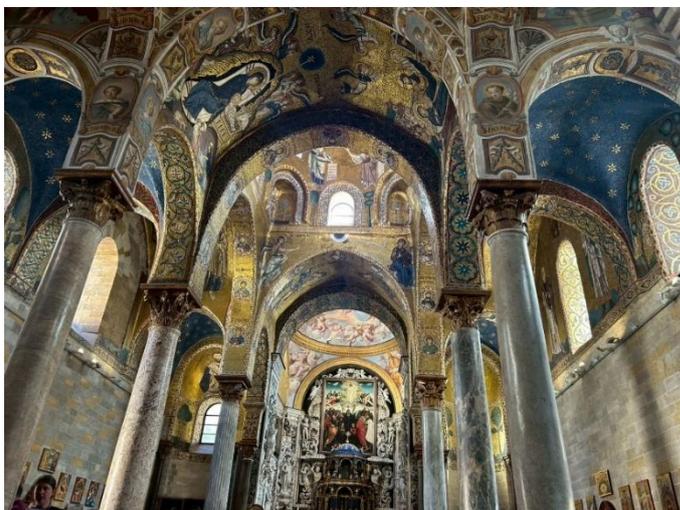


写真16 聖マリア・デッラミラーリオ教会 内部 撮影者：筆者

この教会は、前述した聖カタルド教会に隣接している教会である。建設年代は1140年頃とされ、ルッジェーロ2世の下で提督を務めたジョルジョ・ダンテオキア(Giorgio d'Antiochia)が、聖母マリアに捧げる教会として建設した。元はギリシア正教の教会であったが、その後隣接した土地に、エロイーザ・マルトラーナによってベネディクト会女子修道院が建てられた。この際、教会の



写真17 聖マリア・デッラミラーリオ教会 柱
撮影者：筆者



写真18 聖マリア・デッラミラーリオ教会
ルッジェーロ2世のモザイク 撮影者：筆者

所有も修道院に移り、創設者の名前にちなんでマルトラーナ教会と呼ばれるようになった。時代と共に改築・拡張が繰り返し行われたため、12世紀のノルマン建築要素だけでなく、増築部分にはバロック期の要素が加えられている。

教会内部はバロック期のフレスコ画、ビザンツ様式のモザイク、アラビア文字の柱装飾(写真17)など、様々な要素が共存した空間となっている。特に、モザイク装飾の大部分は建設当時の姿を有しており、12世紀の貴重な現存作例であると考えられている。教会入口の右側に飾られていた、キリストの手から直接王冠を受けるルッジェーロ2世のモザイク(写真18)は、増築前の教会のファサードに付属していたものである。

12世紀の建設当時、教会は中央にドーム構造を

持つギリシア十字式に即していた。(図7)現在の教会は、初期の教会に増築部分が接続したような状態を示している。したがって、特に初期教会の部分には、同時期に建設された聖カタルド教会との類似点が見られる。まず、ドーム部分の構造は、基部の八角形や窓の付け方等と同じ手法が用いられているということが分かる。また、アーチを支える柱の形状や柱頭装飾の内容にも同様の形式が見られる。柱は全て模様が異なっており、建材の転用がここでも行われたと推察される。一方でマルトラーナ教会には、初期教会部分を中心に天井部分及び壁面を飾るきらびやかなモザイクが見られる。ドーム内側には、東方教会特有の、パントクラトールのキリスト¹⁰像のモザイクが見られ、周辺を四福音書記者が囲んでいる。その他にも、聖書上の様々な人物のモザイク装飾が施されている。この初期教会部分を除く現在の祭壇部分や教会の外部装飾は、後世の増築に

¹⁰ 父なる神と子なる神に使用される形容辞。特にビザンティン美術では、絵画やモザイクに描かれたキリストのイコン類型に対しても用いられる。その場合、キリストは胸像または半身像で、祝福や訓戒を与える右手は上にあげるか、もしくは左手に持つ福音書を指差す。髭の生えた威厳のある表情を持つことが多い。ビザンティン建築では、教会装飾の頂点を示すものとして中央ドームに配置される。

よりバロック様式の要素が用いられているため、全ての部分で聖カタルド教会に用いられている建築要素と比較を行うことは難しい。しかし、12世紀という時代の枠組みを超え、様々な様式を一つの建築空間の中で共存させているというその特異性は他に類を見ないものであり、訪れた者の記憶に残る特別な体験を提供する。

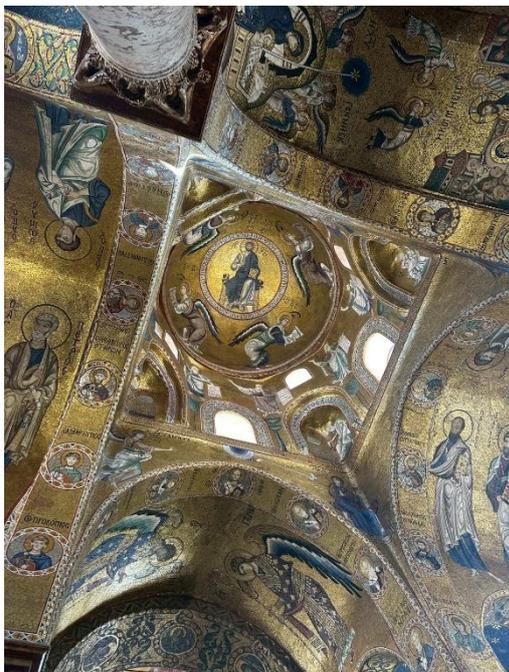


写真19 聖マリア・デッラミラーリオ教会
ドーム部分内側モザイク 撮影者：筆者

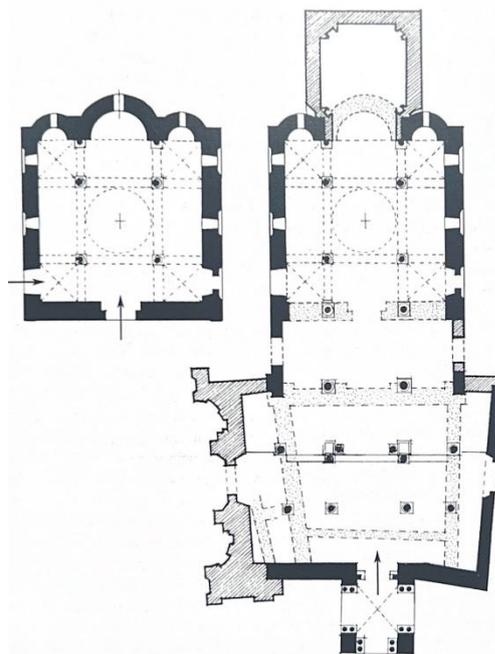


図7 聖マリア・デッラミラーリオ教会 平面図
左：12世紀 右：現在の教会
(Palermo La "Martorana" e San Cataldo より引用)

● ノルマンニ宮殿・パラティーナ礼拝堂
Palazzo Reale・Cappella Palatina



写真20 ノルマンニ宮殿 外観 撮影者：筆者

パレルモのメインストリートである、ヴィットーリオ・エマヌエーレ通りを海とは反対側へ向けて進むと、生い茂るヤシの木や噴水が南国の雰囲気を感じさせる庭園が現われる。さらに奥へ進むと現れるのが、現在ノルマンニ宮殿と呼ばれる建築物である。内部には、現在も使用されているシチリア州議会場や博物館、庭園やノルマン時代の礼拝堂などが含まれている。建物は9世紀にパレルモを支配していたアラブ人たちが建てた城砦を、12世紀に入りルッジェーロ2世及びその後継者たちが拡張させたものである。16世紀から17世紀にかけて、支配勢力の移り変わりとともに大幅な

アラブ人たちが建てた城砦を、12世紀に入りルッジェーロ2世及びその後継者たちが拡張させたものである。16世紀から17世紀にかけて、支配勢力の移り変わりとともに大幅な



写真 21 ノルマンニ宮殿 祭壇
撮影者：筆者



写真 22 ノルマンニ宮殿 西側壁面
撮影者：筆者

改築が施されたため、現在見る事ができるノルマン時代の建築は、王宮礼拝堂、ルッジェーロの間と呼ばれる王の私的礼拝空間、そして宮殿南端にある監獄などの部分に限られる。

宮殿内部に足を踏み入れて豪華な階段を上ると、一面にモザイク装飾が施された壁面が目に入ってくる。この内部にあるのが、12世紀のノルマン時代に建設された王宮礼拝堂である。ルッジェーロ2世により1130年に着工され、1143年に献堂された。内部空間は、長方形を基本とするバシリカ式と、祭壇上部のドーム構造に見られる集中式を合体させたような構成で、内陣とドームの両方にパントクラトールのキリスト像が配されている。身廊上部の壁面には、天地創造からヤコブ伝までの旧約聖書の場面が上下に渡って展開し、側廊の壁には新約聖書の「使徒言行録」といくつかの新約聖書外典を典拠とする聖ペテロ伝・聖パウロ伝が描かれている。一方で礼拝堂西側には、大理石の象嵌細工で彩られた巨大な玉座が配され、その上方の壁面には一对の獅子像と、さらに上方には使徒ペテロとパウロを両脇に従え、玉座に座るキリストのモザイク装飾が施されている。これらの図像表現は、巨大な玉座が象徴するシチリア王権という世俗の権威が、その上部に描かれた獅子像やキリスト像によって保障されていることを示していると考えられている。さらに、後陣のパントクラトールのキリスト像がこの西側壁面を見下ろすように描かれていることで、地上における世俗の権威は天上の神から授けられているということが象徴的に示されている¹¹。西壁の玉座の他に、床や説教壇などにも大理石の象嵌細工が見られ、説教壇や大燭台にはそれに加えて精緻な彫刻が施されている。

¹¹ 児島由枝「中世シチリア王国の聖なる空間—パレルモ宮廷礼拝堂の天空と大地」『美術史研究』57,早稲田大学美術史学会,2019年,133-141項.



写真 23 ノルマンニ宮殿 天井部分
 撮影者：筆者

天井部分に広がっているのは、ムカルナス¹²と呼ばれるイスラーム様式の装飾である。小さな窓のような空間が幾重にも重なり、その一つ一つに饗宴の場面や動物、楽器を演奏する人々や踊り子など多種多様な図像が描かれている。礼拝堂という一つの空間にこれほどの多くの要素が詰め込まれている例は他に類を見ないものである。全体として、訪れる者が皆キリストやそれに保障されるノルマン王権の権威を感じることができるような、人種や言語、そして時代をも超越する普遍的な要素を体感することができる建築であった。

聖カタルド教会との類似点として、祭壇上部のドーム部分やそれを支えるアーチ、柱の形状を挙げることができる。明かりを取り込む窓が配されたドームと、厚みのあるアーチ、柱頭装飾が施された柱からは、同時代の建築であることが読み取れる。一方で、全面的にモザイク装飾が施されている点や、集中式とバシリカ式を組み合わせたような構造を持つ点は宮廷礼拝堂独自のものであり、王権の影響力の大きさを感じさせる。後陣とドーム部分の両方にパントクラトールのキリスト像が見られるという構図は、入口からアプス部分へ向けて救済への道を示すバシリカ式を持つ軸線と、地上から天上世界の頂点を示すドーム空間へと向かう垂直の軸線を統合させ、あらゆる人々にとっての祈りの空間を創出しているのではないかと考えられている¹³。

王宮礼拝堂の他、現在も残る数少ないノルマン時代の遺構の一つであるルッジェーロの間(Sala di Re Ruggero)と呼ばれる空間にも、ノルマン王による優れたモザイク

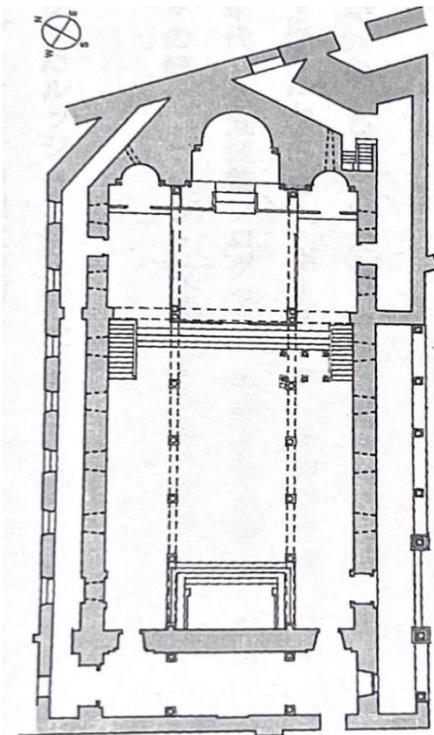


図8 王宮礼拝堂 平面図

(「ノルマン王によるモザイクーパレルモ(シチリア)のカッペッラ・パラティーナー」より引用)

¹² 蜂の巣天井(ハニカム・ヴォールト)、鍾乳石飾り(スタラクタイト)とも呼ばれる。アーチ曲線を折り曲げることによって花卉形の曲面を創出し、それを層状に重ねた構造を持つ。11世紀末頃に天井装飾としての形態を確立させ、中央アジアからスペインまでの幅広い地域におけるイスラーム建築の装飾に見る事ができる。

(深見奈緒子編『イスラム建築がおもしろい!』彰国社,2010年,136頁。)

¹³ 西田雅嗣編『ヨーロッパ建築史』昭和堂,1998年,55-73頁。

装飾が広がっている。この空間は、礼拝堂から少し離れた、かつての王の私的居住エリア内に存在している。長方形の部屋の内部は大理石の壁とアーチ、交差ヴォールトの天井に覆われており、それぞれが金地のモザイクできらびやかに飾られている。特徴的なのはその主題で、宗教的な内容ではなく、多様な動植物の姿が生き生きと描かれているのが印象的である。これらの内容は、ノルマン王権の神格化を表現するものとして捉えられる。特に、天井の中央部分に見られるウサギを押さえ付けるワシの姿には、王権を象徴するワシが臆病さを表すウサギを支配するという構図が内在している。一つの空間の中に、宗教や民族の垣根を越えた多様な要素を共存させる柔軟な発想を持つノルマン王ならではの豊かな世界観を、より堪能することができる空間であった。



写真 24 ルッジェーロの間 天井部分

撮影者：筆者



写真 25 ルッジェーロの間 入口側

撮影者：筆者

- 聖マリア・デッラ・カテーナ教会
Chiesa di Santa Maria della Catena



写真 26 聖マリア・デッラ・カテーナ教会

撮影者：筆者

ヴィットーリオ・エマヌエーレ通りを、ノルマンニ宮殿とは反対側のティレニア海方面へ進むと、港を見守るようにどっしりと構える教会に遭遇した。この教会は、聖マリア・デッラ・カテーナ教会(聖マリアの鎖教会)と呼ばれるゴシック様式の教会である。古代の商業港を閉鎖するための鎖が繋がっていた中世期の礼拝堂を元に、1520年頃に建設された。内部はカタルーニャ風ゴシック様式を踏襲した構造で、12世紀のノルマン建造物群とは異なり、天井を覆う交差ヴォールトや壁の薄さが特徴的である。1884年から1891年にかけて、聖カタルド教会の修復を担ったジュゼッペ・パトリコロによってこの教会も修復が行われた。ノルマン朝よりも後の時代に建築された教会であるが、パレル

モという都市が持つ文化の重層性を感じさせるものとして、重要な建築であると言える。

● 聖ジョヴァンニ・デッリ・エレミティ教会

Chiesa di San giovanni degli Eremiti



写真 27 聖ジョヴァンニ・デッリ・エレミティ

教会 撮影者：筆者

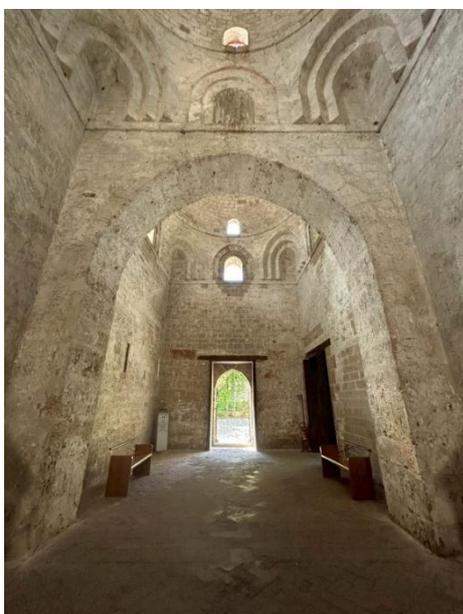


写真 28 聖ジョヴァンニ・デッリ・エレミティ教会

撮影者：筆者

ノルマンニ宮殿からほど近い場所に、五つの赤い丸屋根を有する個性的な教会が存在する。この聖ジョヴァンニ・デッリ・エレミティ教会は、1143～1148年の間にシチリア王ルッジェーロ2世により建設された。この場所には、6世紀頃にビザンツ帝国支配時代の修道院が建てられていたが、イスラーム支配時代にモスクに改装され、その後ノルマン人支配時代に再び修道院に戻された。教会部分はルッジェーロ2世による建築であることが明らかになっている。教会とそれを取り巻く庭園・回廊や鐘楼を含む様々な建物全体を包含して、聖カタルド教会やノルマンニ宮殿と同様、アラブ・ノルマン建築群の代表的な作例の一つとして世界遺産に登録されている。教会の周辺には、ヤシの木やサボテン、果実の実った木々など、南国風の雰囲気が漂う風景が広がっており、その中に堅牢な構造を持つ教会建築群がそびえたっている。教会内部は、五つのドームを支えるアーチと柱が構成する十字型の構造で、ドームの基部に見られる八角形の構造や、建物の厚みを大きくはみ出さない後陣部分など、聖カタルド教会との類似点を明確に指摘することができた。

この建築が持つ大きな特徴は、教会の北側に隣接する長方形空間の存在である。この空間は「アラブの部屋」¹⁴と呼ばれており、シチリアのイスラーム支配時代にモスクとして使用されていたものであると考えられている。そのため、この教会はモスクを前身とし、ルッジェーロ2世による再建で教会として使用されるようになったと捉えることができる。

¹⁴ Rosa di liberto, *Norman Palermo: architecture between the 11th and 12th century, A companion to Medieval Palermo*, Leiden 2013, p.167.

19世紀に、聖カタルド教会の修復工事も担った建築家ジュゼッペ・パトリコロによって整備されている。丸屋根の赤色はその際に塗布されたものである

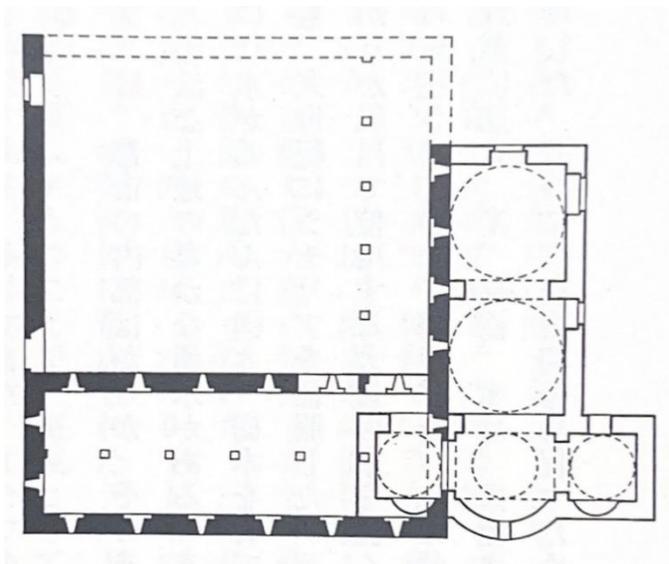


図9 聖ジョヴァンニ・デッリ・エリミティ教会 平面図

黒色部分：かつてのモスクの想定範囲

(陣内秀信『シチリア〈南〉の再発見』80頁より引用)



写真29 聖ジョヴァンニ・デッリ・エリミティ教会

回廊 影者：筆者

- パレルモ大聖堂

Cattedrale Palermo



写真30 パレルモ大聖堂 外観 撮影者：筆者

パレルモ大聖堂は、パレルモ大司教区の大聖堂として都市の中心部に位置している。4世紀にキリスト教のバシリカとして建設された後、ビザンツ帝国の支配下であった6世紀頃に初代の大聖堂となった。イスラーム支配時代には一度モスクに転用されていたが、1185年にノルマン人の手によって改装され、献堂式が行われた。その後14～15世紀の間にはゴシック様式による増改築と、18世紀末には大幅な堂内改築が行われている。そのため、現在見る事ができる大聖堂は各部位に様々な要素が散りばめられた状態を呈している。その中でもノルマン人支配時代の様相を色濃く遺しているのが、大聖堂アプス側の外壁面に見られる装飾である。円形や幾何学模様、アーチが構成する独特な装飾は、同時期に建造されたモンレアール大聖堂のアプス側の外壁面にも見られる典型的な様式を感じさせる。また、聖堂内部は改装されているため、建設当初の要素はほとんど遺されていないが、入口左側の一面にはノルマン王朝の霊廟

が存在している。そこには、初代シチリア王のルッジェーロ2世やその娘コスタンツァ、そして彼女の夫でドイツ皇帝のハインリヒ6世やフリードリヒ2世といった、パレルモの繁栄に貢献した人々が埋葬されている。



写真31 パレルモ大聖堂 アプス側外壁 撮影者：筆者



写真32 パレルモ大聖堂 身廊 撮影者：筆者

- 聖クリスティーナ・ラ・ヴェテレー教会

Chiesa di Santa Cristina La Vetere



写真33 聖クリスティーナ・ラ・ヴェテレー教会 撮影者：筆者

パレルモ大聖堂からほど近い場所に、12世紀のアラブ・ノルマン様式による影響が色濃く見られる教会が存在した。筆者が大聖堂を訪問した際、路上にこの教会の情報が記載された看板が立てられており、そこで急遽訪問を決めた。

この教会は、大聖堂の建設を手掛けた大司教グアルティエロ・オッフファミリオ(Gualtiero Offamilio)により、1174年に建てられた。建設当初はシトー会によって管理され、ハインリヒ6世の治世中(1194-1197年)には大聖堂の一部に加えられた。1572年以降、教会は聖三位一体会の所有となり、巡礼者を支援するための施設として使用された。教会内部はシンプルなギリシャ十字式の平面と厚みのある壁面、アーチ、柱によって構成されてい

る。アーチの形状や壁の厚み、側廊天井の交差ヴォールト部分などに、聖カタルド教会との類似した様子が見られる。一方で、柱や壁面など教会全体としてシンプルな素材で構成されており、装飾性は低いと言える。アラブ・ノルマン様式の他の建造物群とも比較できる、貴重な作例である。

第四節：チェファルとモンレアーレ

チェファルは、パレルモから海岸沿いの道路を東へ75キロメートル進んだ場所にある町である。また、モンレアーレは、パレルモから南西方向へ8キロメートル離れた場所に位置している。パレルモからほど近いこの2つの町は、いずれもノルマン王朝の手掛けた豪華絢爛な大聖堂を有している。聖カタルド教会と同時代のアラブ・ノルマン様式として、またノルマン王朝の影響が強く現れた建築作品として、参照すべき貴重な作例であると考え、今回の研究旅行で両者へ訪問することを決めた。チェファルへはパレルモ中央駅から電車で1時間弱、モンレアーレへはパレルモからバスに乗り、40分程度で行くことができる。

● チェファル大聖堂

Duomo di Cefalù

現在のチェファルは、美しいビーチやホテル、レストランが多く、バカンスの目的地としても人気を集める、風光明媚な街並みを有している。一方で都市としての歴史は古く、シチリアの原住民が構えた岩山の上の城砦町が起源であるとされている。この岩山はチェファルのシンボルでもあり、過去には街の防衛上重要な役割を担った。そのため、ノルマン時代の城壁や、城砦の遺構が山の随所に見られる。また、山の中腹には「ディアナ神殿」¹⁵(写真35)と呼ばれる古代の遺構も見られ、チェファルの歴史的重層性を感じさせる。現在この岩山は頂上まで登ることができ、チェファルの街全体を見下ろす絶景を楽しむことができる。

1130年代には、チェファルの地に戦略的な価値を見出したルッジェーロ2世によって、重要拠点の一つとして開発が進められた。その中で、彼は岩山の麓に大聖堂を建設した。伝説によると、海上で大嵐に会ったルッジェーロ2世が、沈没しそうな船の上で、無事に岸边にたどり着いたらその地に大聖堂を建てると神に誓願した¹⁶。その結果漂着したのがチェファルの街であり、大聖堂建設に至ったという。しかし実際には、ルッジェーロ2世によるチェファルの開発はパレルモ大司教区の権力を弱めるという政治的意図が多分に含まれていたと考えられている¹⁷。また、この場所をノルマン王家の霊廟にするために、大聖堂が未完成であった1145年の内に、事前に自身と王妃のための石棺を作らせていたが、死後はパレルモの大聖堂に埋葬されている。

チェファル大聖堂は1131年、ルッジェーロ2世の命で建設された。大聖堂の正面入り口側からは、背後にそびえる壮大な岩山と、左右に鐘楼を構えるファサードが相まって、剛健な趣を感じることができる。ファサード中央上部の連続アーチや、入口の三連アーチ

¹⁵ 前9世紀のアルカイック期に作られた巨石建造物が、前4～5世紀に再構成されたものとされている。石が積み上げられた構造で、シチリアの古代史に遡る重要な遺跡として捉えられている。

¹⁶ 陣内秀信『シチリア〈南〉の再発見』淡交社、2002年、138頁。

¹⁷ ジョン・ラウデン『初期キリスト教・ビザンティン美術』増田朋幸訳、岩波書店、2000年、327-328頁。

からは、アラブ・イスラーム建築の要素が読み取れる。内部は比較的簡素な造りであるが大規模で、内側身廊の左右に並ぶ尖塔アーチと柱付きの柱が印象的である。内陣に開けられた小さな窓から漏れる一筋の光が、聖堂全体に神聖な雰囲気を加えているようにも感じられた。内陣部分にのみ施されたモザイク装飾は、中央にパントクラトール（万物の支配者）としてのキリスト、その下に聖母マリア、四大天使、使徒ペテロとパウロ、その他、使徒や預言者などが並べられた構図で、パレルモの王宮礼拝堂やマルトラーナ教会のものと同様、現存するノルマン時代のモザイク装飾における最高傑作に数えられている。キリストが持つ書物には、ギリシア語とラテン語の2言語で「私は世の光である。私に従う者は暗闇のなかを歩かず、命の光を持つ」（ヨハネによる福音書8章12節）と記されている。

また、チェファル大聖堂は内部に回廊を有している。この回廊はシチリア島では最古のもので、サン・ジョヴァンニ・デッリ・エレミティ教会やモンレアーレ大聖堂の回廊の原型になったと考えられている。四角形の平面を二本の対になった柱とそれに支えられたアーチが囲み、柱頭には動植物のモチーフや、ノアの箱舟、アダムとイヴなど聖書の場面を表すモチーフが刻まれている。中央の果樹が植えられた庭園部分は、聖書における楽園や復活の庭を象徴している¹⁸。1805年に、落雷による火災で回廊の東側が焼失し、1952年に北側が修復工事のために解体されており、現在も未だ修復の途上である。



写真 34 チェファル 岩山からの街並み
撮影者：筆者



写真 35 デイアナ神殿 撮影者：筆者

¹⁸ 創世記(2:8-15)に登場する、エデンの園に植えられたイチジクや、オリーブ、ナツメヤシ、オレンジなどの植物が植わった庭園を指す。



写真 36 チェファル大聖堂 外観 撮影者：筆者



写真 37 チェファル大聖堂 内部 撮影者：筆者



写真 38 チェファル大聖堂 内陣部分 撮影者：筆者



写真 39 チェファル大聖堂 回廊 撮影者：筆者

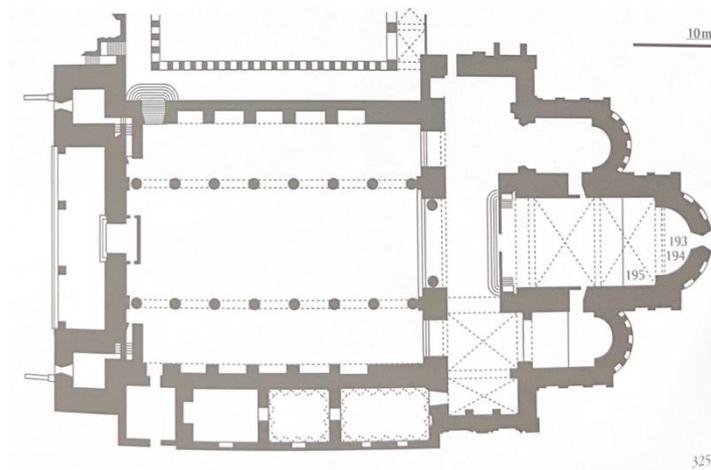


図 10 チェファル大聖堂 平面図
 (ジョン・ラウデン著『初期キリスト教美術・ビザンティン美術』325頁より引用)

- モンレアーレ大聖堂

Duomo di Monreale

モンレアーレは、パレルモの街並みを見下ろすように広がる丘の上の街である。現在は美しい風景や豪華絢爛な大聖堂を目当てに、多くの観光客が訪れる場所となっている。かつては自然豊かな地域で、12世紀にはノルマン王家の狩猟場としても使われていた。そのような場所にモンレアーレの街が建設されることになった背景には、ルッジェーロ2世の孫であり、第三代シチリア王にあたるグリエルモ2世が大きく関与している。彼も祖父王と同様に、パレルモ大司教の権力を牽制するという政治的目的の下、新たな宗教施設の建設に力を入れた¹⁹。まず1174年に、この地にベネディクト派修道院の建設をはじめ、完成後、1183年に大司教区の地位を与えられた。この新しい司教区はモンティス・レガリス(王の山)と名付けられ、今日のモンレアーレという地名の元となった。グリエルモ2世はモンレアーレの大司教区に多くの領地を寄進し、その拡大に貢献した。死後は大聖堂内に埋葬されている。

大聖堂の正面は、チェファル大聖堂のものと類似した特徴を持ち、左右に鐘楼を構えるノルマン時代の典型的な構成を有している。北側の側面に設けられた入口から内部に入ると、まず内部壁面のほとんどを埋め尽くす圧倒的なモザイク装飾の量に驚かされる。聖堂内部を覆うモザイクの範囲は約6340㎡にも及び²⁰、少なくとも1億個以上のガラスや大理石のテッセラが必要であると言われており²¹、建設当時のノルマン王が誇った圧倒的な権威を感じさせる。バシリカ式の内部は、身廊と側廊を左右それぞれ9本の柱が仕切り、その全てに植物などの柱頭装飾が施されている。また、これらの柱は古代遺跡からの再利用であることが伺える。身廊上部に架かる木の梁や屋根裏を含む建物内部全体は金地のモザイクや金箔で覆われており、内陣部分にはチェファル大聖堂と同様、パントクラトールのキリスト像が配されている。その一段下中央には聖母子と天使、左右に各6人並んだ12使徒の姿が描かれ、もう一段下には中央の窓を挟んで様々な聖人が並んでいる。また、内陣の両脇には2つの玉座が据えられており、向かって左側、北壁の玉座の上部にはキリストから王冠を受けるグリエルモ2世の姿が、向かって右側、南側の玉座の上部にはグリエルモ2世がモンレアーレ大聖堂の模型をマリアに差し出している場面が描かれている。身廊の壁面には創世記の物語が、側廊とそれに続く袖廊には新約聖書の場面を描いたモザイクが並んでおり、パレルモの王宮礼拝堂の壁面モザイクとも類似した様式を読み取ることができる。内陣の外側部分には、パレルモ大聖堂の同部分と類似した様式を見る事ができる。

モンレアーレ大聖堂もまた、元修道院の回廊を有しており、大聖堂正面から向かって右

¹⁹ ジョン・ラウデン(2000),前掲書,335頁.

²⁰ 陣内秀信(2002年),前掲書,122頁.

²¹ ジョン・ラウデン(2000),前掲書,329頁.

手に見える入口から入ることができた。チェファル大聖堂の回廊を参考に、12世紀末に建設されたこの回廊は、中庭を囲む47メートル四方で、2本ずつ並べられた計228本の柱がアーチを支えている。柱の表面にはモザイクによる幾何学的な模様が刻まれ、柱頭には動植物や聖書の諸場面、大聖堂の模型を聖母マリアに差し出すグリエルモ2世などが登場する。



写真40 モンレアーレ丘上からの風景 撮影者：筆者



写真41 モンレアーレ大聖堂 正面 撮影者：筆者



写真42 モンレアーレ大聖堂 内陣部分 撮影者：筆者

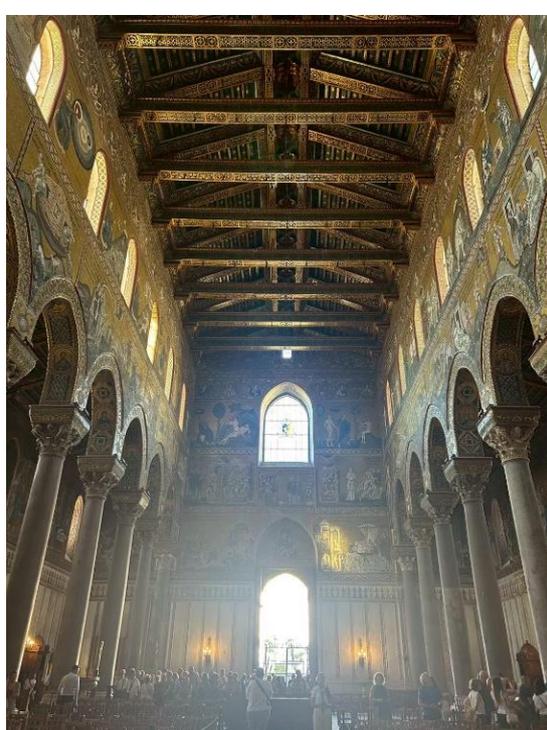


写真43 モンレアーレ大聖堂身廊 撮影者：筆者

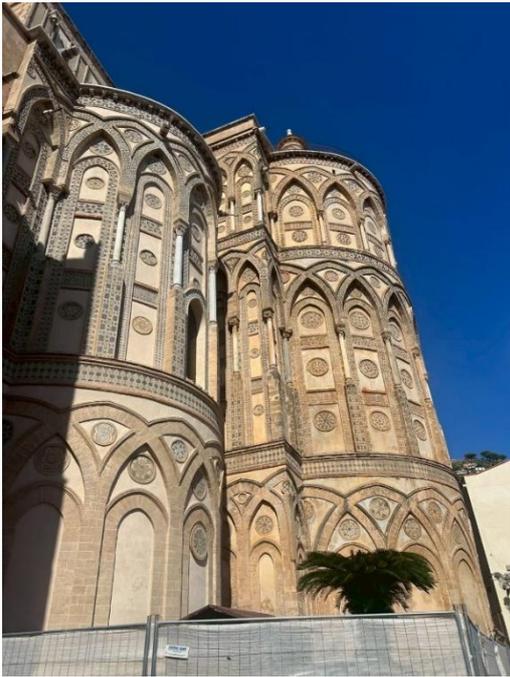


写真 44 モンレアーレ大聖堂 内陣外側 撮影者：筆者



写真 45 モンレアーレ大聖堂 回廊 撮影者：筆者

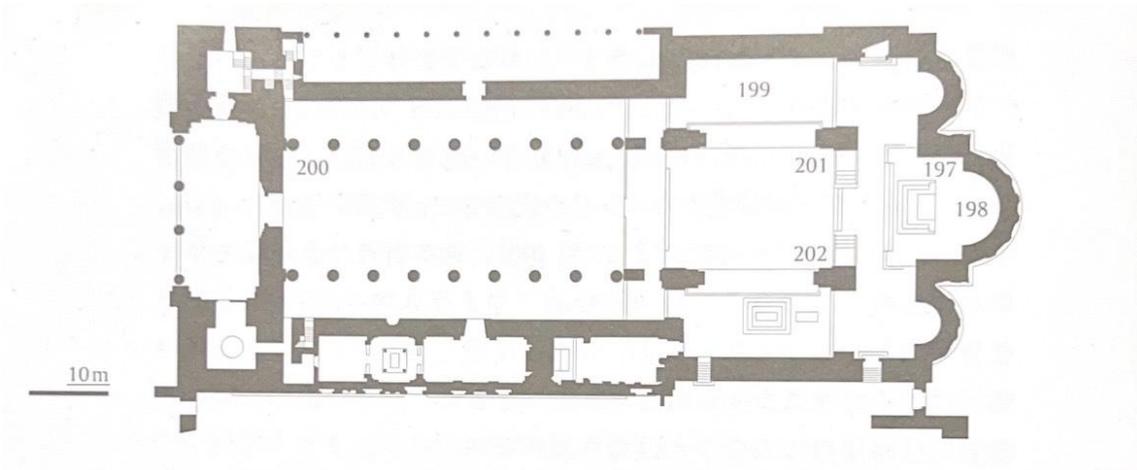


図 11 モンレアーレ大聖堂 平面図

(ジョン・ラウデン著『初期キリスト教美術・ビザンティン美術』325頁より引用)

◆ 第二章 プーリアとアラブ・ノルマン様式

聖カタルド教会について詳細な研究を行ったローザ・ディ・リベルト氏は、聖カタルド教会が含む円筒ドームなどの建築的要素は、プーリア州の一部宗教建築においては中世初期から既に表出していたと述べている²²。これには、シチリアを支配したノルマン人たちの支配域が現在の南イタリア、プーリア地方周辺を発端として広がっていったことや、聖カタルド教会の建築を担ったマイオーネ・ディ・バーリの出身地がプーリア地方であったことなどが影響したと言われている。本章では、先行研究中で指摘されていた宗教建築群を参考に、本研究旅行中に調査を行うことができた同時代のプーリア州に現存する建築群について、その建築的要素とシチリアで見られた建築との類似性について検討していきたい。

第一節：モルフェッタとトラニー

● モルフェッタ旧大聖堂

Molfetta. Duomo di San Corrado



写真 46 モルフェッタ旧大聖堂 撮影者：筆者

モルフェッタの旧大聖堂は、元巡礼者であった聖人を記念した宗教建築である。1130年頃、モルフェッタに設けられていた十字軍兵士のための施療院に、コラードという人物が収容される。彼は聖地エルサレムに巡礼して修業しており、その帰路で病を得ていた。最後は洞窟での隠棲の末、1155年に亡くなる。死後はモルフェッタの守護聖人となり、この旧大聖堂は彼のために捧げられた宗教建築として、建設が進められた²³。史料が残存しておらず、創建時期

についての詳細な情報は不明であるが、コラードの死期や建築様式から、12世紀後半から13世紀初頭にかけての建設であると考えられている。1785年に司教座が別の教会に移動したため、現在は大聖堂としての地位を有していない。

外壁には浅く浮き出す交差アーチのような装飾が施されているが、全体的に簡素な印象を与える。アーチを支える柱頭部分には動植物の姿が刻まれており、特に後陣の窓を縁取るアーチの両端にはライオンのような動物の姿が見られる。また、チェファルやモンレアーレの大聖堂にも見られた2本の鐘楼がそびえたつ様式がここでも見られたが、モルフェッタのものは後陣側に建てられている。内部は厚みのある壁と巨大なアーチ、堅牢な柱が構成する力強い空間が広がっており、西側入口と中央の天井部分には聖カタルド教会のもの

²² Rosa di liberto(1996), 前掲論文, pp17-32.

²³ 池田健二『イタリア・ロマネスクへの旅』中央公論新社,2009年,178頁.

のと類似した円筒ドーム構造が見られる。一方、内陣の天井部分はシンプルな円蓋の形状である。これら3つのドームはそれぞれ高さが異なり、中央のものが最も高くなっている。

直線状に3つのドームが並ぶレイアウトや、アーチなどの要素に見られる類似性は高い。聖カタルド教会と建設年代が近いことから、このような建築様式が当時の南イタリアで共通して流布していたということが分かる貴重な作例であると言える。

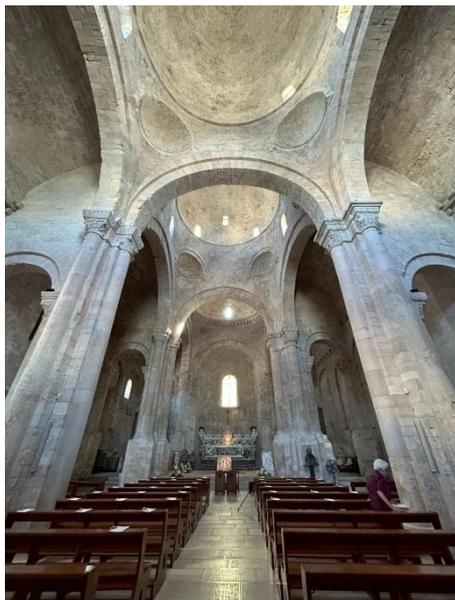


写真 47 モルフェッタ旧大聖堂内部 撮影者：筆者



写真 48 モルフェッタ旧大聖堂後陣部分 撮影者：筆者



写真 49 モルフェッタ旧大聖堂ドーム 撮影者：筆者

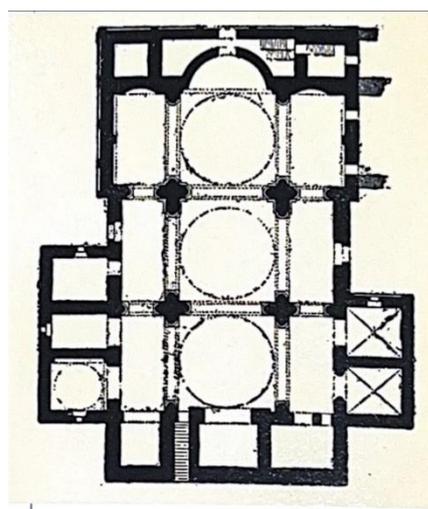


図 12 モルフェッタ旧大聖堂平面図

(陣内秀信監修『建築と都市の美学 イタリアⅡ神聖 初期キリスト教・ビザンティン・ロマネスク』70頁より引用)

● トラーニ大聖堂

Trani. Cattedrale di Sam Nicola Pellegrino



写真 50 トラーニ大聖堂 撮影者：筆者

重要な作例として、イタリア史の中で重要な位置を占めている。なお、内部の撮影は禁止されていた。

大聖堂前の広場からファサードを見ると、全体が上下二段構成になっていることが分かる。これは、上段が大聖堂西面のファサードであり、下段が元の教会に相当する地下聖堂(クリプタ)にあたるためである。下段の前面には上段のテラスに続く階段が設けられており、そこから大聖堂内部へ入ることができる。ファサードは、中央の印象的なバラ窓とその下部の三つの窓、そして基部のアーケード列と扉によって構成されており、それぞれが動植物の細かな彫像によって縁取られている。側面には背の高いアーケードが繰り返し施されており、後陣は壁面からしっかりと張り出している様子を見ることができた。内部は三廊式で、身廊の側面は連続したアーチ・トリビューン²⁴・高窓の三層から成る構造で、チェファルやモンレアーレの大聖堂と類似した様式が確認できる。一方、アーチを支える柱が二本ずつ設けられている点は、この聖堂の特徴的建築要素であると考えられる²⁵。全体としてロマネスク様式の影響が色濃く現れているが、海港都市トラーニの大聖堂として、様々な地域からの影響が垣間見える特徴的な建築であった。

²⁴ 側廊上部、アーチと高窓の間のスペースである階上廊(二階部分を一周する回廊)を指す。
(西田雅嗣編(1998年),前掲書,56頁.)

²⁵ 池田健二(2009年),前掲書,174頁.



写真 51 トラーニ大聖堂ファサード 撮影者：筆者



写真 52 トラーニ大聖堂南側壁面 撮影者：筆者

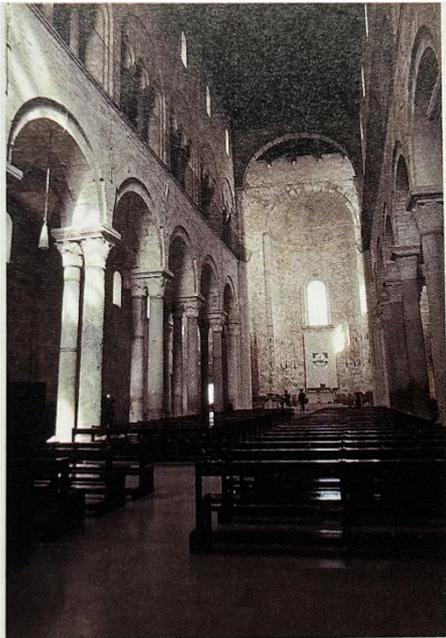


写真 53 トラーニ大聖堂内部
(池田健二『イタリア・ロマネスクへの旅』
172 頁より引用)

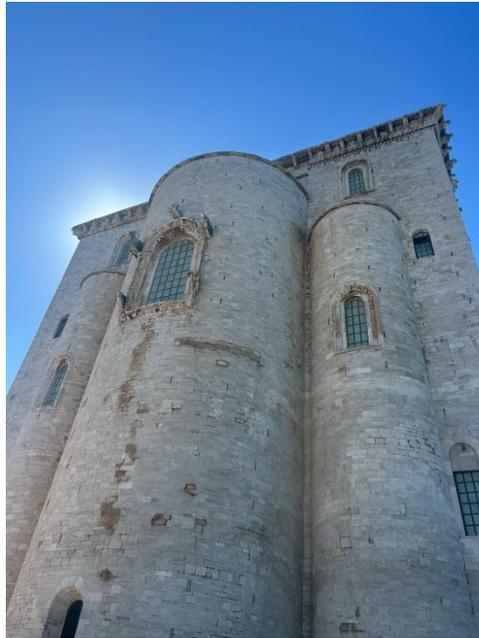


写真 54 トラーニ大聖堂後陣部分
撮影者：筆者

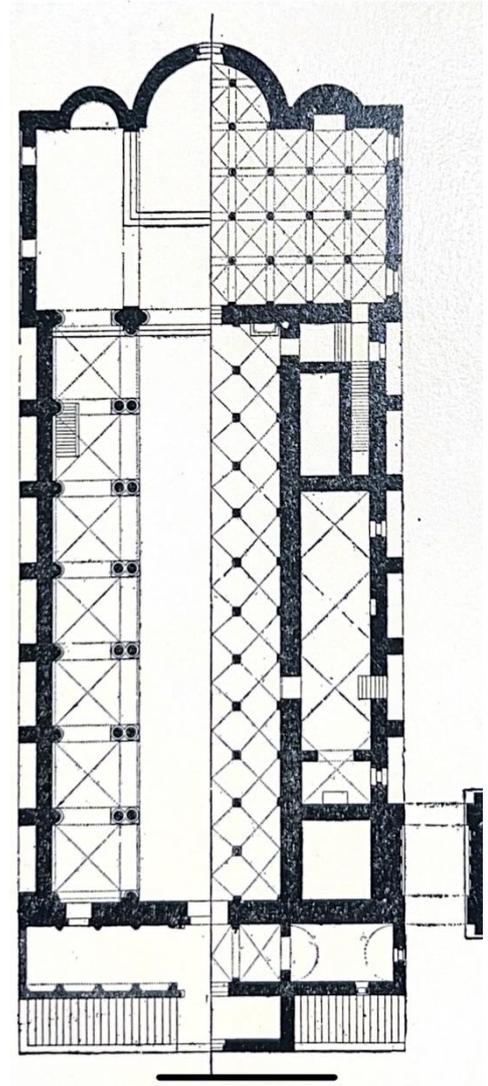


図 13 トラーニ大聖堂平面図
(陣内秀信監修『建築と都市の美学 イタリアⅡ神聖 初期キリスト教・
ビザンティン・ロマネスク』71 頁より引用)

第二節：バーリの聖堂と遺跡

● 聖ニコラ聖堂

Basilica di San Nicola



写真 55 聖ニコラ聖堂 撮影者：筆者

も存在するが、ロマネスク建築史における重要度の高さから、聖ニコラ聖堂に対する言及が多いという傾向がある。聖ニコラは、現在のトルコにあたる地方に存在したミュラの司教であり、3人の子どもを生き返らせるという奇蹟を行ったとされる。そのため、子どもの守護聖人として捉えられており、サンタクロースのモデルとしても扱われている。また彼はバーリの守護聖人でもある²⁶。1087年、バーリの船乗りたちがミュラから聖ニコラの聖遺物を運び出し、それを安置するための建物として建設が始まった。

聖堂正面は装飾が少なく簡素で、左右には低い鐘楼が添えられている。後陣は大聖堂から外部に飛び出さず、外郭の矩形プラン内部に取り込まれているため、外観は全体的に堅牢な印象を与える。壁面にはアーチが刻まれており、正面入り口の両脇に佇む牛の彫像をはじめ、アーチの縁取りや窓の隅といった各所に動植物の彫像が施されている。内部は三廊式のバシリカ聖堂で、身廊と内陣を隔てる3つのアーチや、壁をくぼませるように成形された内陣、4本の記念柱に八角形の屋根を載せたギボリウム(祭壇を覆う天蓋)が特徴的である。天井には後代に制作されたバロック様式の壁画が敷き詰められている。一方、地下聖堂は、翼廊と後陣を合わせた大きさを持ち、様々な柱頭装飾が施された計26本の柱を見ることができる。

三つの後陣の配し方や柱頭装飾、壁の厚み等に見られる要素に、聖カタルド教会との類似性が見られる。建設年代は聖ニコラ聖堂の方が早いと見られるため、プーリア州における作例としてシチリアに伝播し、聖カタルド教会の建築内容に少なからず影響を与えたとも考えることもできる。また、この聖堂は後のプーリア州各地に建造されるロマネスク式教会建築の規範モデルになったと考えられている。

バーリはプーリア州の州都で、ナポリに次ぐ代表的な南イタリアの都市である。古代に起源を持ち、ローマ時代にはバリウムという名で、東地中海方面との交易拠点として繁栄した。その後東ゴート王国やビザンツ帝国、ランゴバルド王国と支配層が移り変わり、ノルマン人による支配時代に再び繁栄を迎えた。サン・ニコラ聖堂はその時代にあたる1087年から1197年の間に建設されたものである。バーリには別の場所に大聖堂

²⁶ 池上俊一・大村次郷著『世界歴史の旅 イタリアー建築の精神史』山川出版社,2009年,37頁。

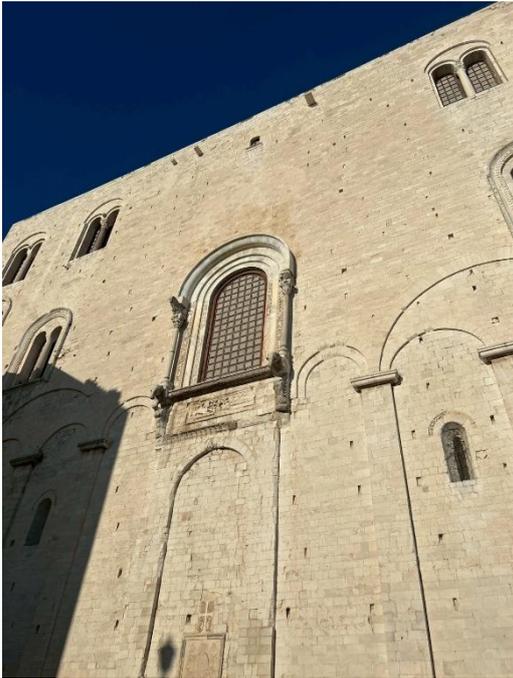


写真 56 聖ニコラ聖堂後陣側壁面 撮影者：筆者



写真 57 聖ニコラ聖堂内部 撮影者：筆者



写真 58 聖ニコラ聖堂内陣 撮影者：筆者

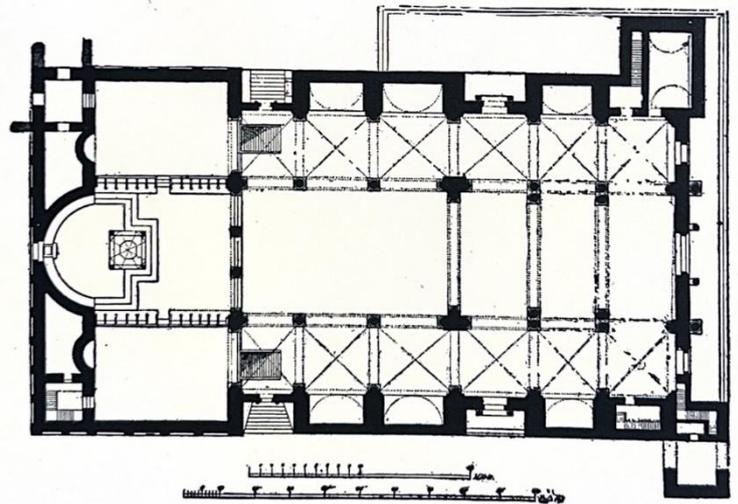


図 14 聖ニコラ聖堂平面図

(陣内秀信監修『建築と都市の美学 イタリアⅡ神聖 初期キリスト教・ビザンティン・ロマネスク』70頁より引用)

● ノルマンノ・スヴェヴォ城

Castello Normanno-svevo



写真 59 ノルマンノ・スヴェヴォ城 撮影者：筆者



写真 60 城内部平面図(現地展示パネルより) 撮影者：筆者



写真 61 ノルマンノ・スヴェヴォ城内部 撮影者：筆者

バーリの街は、海沿いの旧市街部分と、駅や大学が集まる新市街部分が明確に二分された構造を持つ。四角形の区画にそって整備された新市街とは異なり、旧市街は建物がひしめき合い、街路はさながら迷路のような様相を見せている。そんな旧市街の西端を堂々と占めるように、城郭(Castello)が存在している。この城郭は1132年にルッジェーロ2世が建設した要塞建築である。外壁の四つ角に設けられた星形の堡塁は、16世紀に大砲の発達に対応して増築された。建物は後に刑務所や兵舎としての役割を果たし、現在は発掘された物品の展示や国内外のイベントを開催する博物館として使用されている。

城の周囲は堀で囲まれており、堀にかけられた石橋を渡って内部に入る。入口から少し進むと、ノルマン時代の建築の影響が見られる空間を確認することができた。天井の交差ヴォールトやそれを支える柱の形状は、シチリアで見られたノルマン人による建築のものと明らかに類似している。この空間の先には中庭が広がっており、各展示室へと繋がる階段が設けられていた。内部では、11世紀から17世紀におけるプーリア内の建造物に施された彫像装飾の石膏模型や、陶磁器、そしてバーリの街の歴史を紹介するビデオ映像等が展示されている。バーリという街の複雑な歴史的背景を知ることができ、またノルマン王朝との確かな繋がりを実感できる、象徴的な建物であった。

◆ おわりに

今回の研究旅行では、聖カタルド教会の詳細な現地調査及び、周辺地域に存在する同時期の建造物との比較検討を行うことが主な目的であった。聖カタルド教会は、外壁装飾や円筒ドーム、内部の柱、柱頭装飾や後陣、床面装飾といった、異なる起源を持つそれぞれの建築要素を、一つの祈りの空間構築において見事に調和させることに成功した建造物であると言えるだろう。実際に現地調査を行ったことで、先行研究で指摘されていた論点について網羅的に確認し、整理することができた。同時に、この教会が持つある種の異質さと心地よさを兼ね備えた特徴的な宗教空間を体感することができた。このような、異文化横断的な聖堂建築を実現させたその背景には、様々な地域から集められた、聖堂建築のプロ集団としての職人たちの存在や、ノルマン人による柔軟な支配体制下に存在した文化的多様性などの建築技術的・政治社会的要因があるということが理解できた。

また、同時代の11～13世紀におけるパレルモ市内、および、モンレアーレ、チェファル、プーリア州といった周辺都市にまで足を延ばし、聖カタルド教会以外の複数の聖堂でもフィールドワークを行ったことは、今回の研究旅行の大きな成果となった。なぜなら、聖カタルド教会との類似点を中心に、建築的特性を明らかにすることで、ノルマン人が手掛ける建造物の「共通言語」を探ることができたからだ。特に、ノルマン人が勢力拡大の出発点としたプーリア州をはじめとする南イタリアは、それ以前にもギリシア・ビザンツ勢力やイスラーム勢力との交流が展開されていた。このような地域の歴史的特性は、プーリア・ロマネスクと呼ばれる、独特の建築様式を生み出す最大の要因であったと考えられる。ノルマン人によって運び込まれたこれらの文化的・建築的要素は、シチリアに深く堆積する文化的土壌の上で、新たに移植され・独自に翻訳されながら、パレルモやモンレアーレ、チェファルで見られたような多様な様式を展開させるに至ったのであろう。聖カタルド教会をはじめ今回訪れたどの建造物も、当時の社会、文化の多様性の重要な証拠を現代に伝えている。

今回シチリア内でノルマン人による建造物群の情報収集を行っていく中で、アラブ・ノルマン様式という建築的な文脈を繰り返し目にした。それはラテン・カトリック文化、ギリシア・東方正教（ビザンツ）文化、イスラーム文化を確かに包含するものであり、シチリアや南イタリアの文化的価値の向上に貢献する言葉であるとも捉えられる。実際、旅行中に訪れた各地の教会建築では、ヨーロッパやアジアなど世界各国からの観光客が絶えず訪れ、建物内では様々な言語によるガイドツアーが行われる様子が見られた。このような文化的価値づけは、貴重な文化財を保護することに繋がる一方で、地域住民のアイデンティティを構成する要素に紐づけられた不適切な政治利用や、オーバーツーリズムといった諸問題を引き起こす可能性も孕んでいる。アラブ・ノルマン様式という言葉が持つ歴史的背景や意義を追求するなかで、このような、現代における政治的・社会的問題に想いを馳せながら、我々現代人には、国籍を問わず、過去から伝えられた文化遺産を正しく保護し続ける義務が課せられていることを実感した。なぜなら、アラブ・ノルマン様式という、一時代のシチリア島に確実に存在した文化様式の内質は、まさに、そのような、多様な民族文化の差異を自由に乗り越えて行くような、政治的・

文化的「寛容性」を象徴していると考えようになっただからだ。14日間という短い時間ではあったが、シチリア・南イタリアの文化を肌で感じ、現地でしか得られない様々な知見や画像データなどの情報を収集することができた。この貴重な経験を、今後の研究活動へと活かしていきたい。

【参考文献】

- ・ Rosa di liberto, La chiesa normanna di S. Cataldo a Palermo, Rivista di storia dell'architettura e restauro, Nuova serie-Anno IX-N.17- Giugno 1996.
- ・ Rosa di liberto, Norman Palermo: architecture between the 11th and 12th century, A companion to Medieval Palermo, Leiden 2013.
- ・ Francesco Basile, La cappella capitolare di San Cataldo Scrigno custode di simboli dai significati nascosti, UNIVERSITÀ DEGLI STUDI DI PALERMO,2014.
- ・ Marzia Tarsia, La chiesa di San Cataldo:rilievo e restituzione, UNIVERSITÀ DEGLI STUDI DI PALERMO,2014.
- ・ Rodo Santoro 『Palermo La“Martorana” e San Cataldo』 Arnone Editore,2005.
- ・ 藤澤房俊 『地中海の十字路＝シチリアの歴史』 講談社,2019 年.
- ・ 紅山雪夫 『シチリア・南イタリアとマルタ』 トラベルジャーナル,2001 年.
- ・ 児島由枝 「中世シチリア王国の聖なる空間ーパレルモ宮廷礼拝堂の天空と大地」 『美術史研究』 57,早稲田大学美術史学会,2019 年,133-141 頁.
- ・ 伊藤怜 「ノルマン王によるモザイクーパレルモ(シチリア)のカッペッラ・パラティーナー」, 増田朋幸(編) 『聖堂の小宇宙』 竹林舎,2016 年,169-195 頁.
- ・ 深見奈緒子編 『イスラム建築がおもしろい!』 彰国社,2010 年.
- ・ 西田雅嗣編 『ヨーロッパ建築史』 昭和堂,1998 年.
- ・ 陣内秀信 『シチリア〈南〉の再発見』 淡交社,2002 年.
- ・ ジョン・ラウデン 『初期キリスト教・ビザンティン美術』 増田朋幸訳, 岩波書店, 2000 年.
- ・ 池田健二 『イタリア・ロマネスクへの旅』 中央公論新社,2009 年.
- ・ 池上俊一・大村次郷著 『世界歴史の旅 イタリアー建築の精神史』 山川出版社,2009 年.